



## イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 611 回 そぐわない「二礼二拍手」

2015.1.11

我が故郷・熊谷市に愛称「聖天様」と呼んでいる、**聖天山歓喜院**という、高野山真言宗の寺院がある。日本三大聖天のうちの一つに数えられ、平成24年7月に「国宝」として指定された。初詣はかなりの参拝客が訪れ、いつも以上に賑わっている。

…晴れ着を綺麗に着飾った若いお嬢さん二人、  
神妙な顔つきで本殿に向き、いきなり「**二礼二拍手**」、お賽銭を挙げ、堂々と立ち去った。  
そのすぐ後ろにいた、やはり若い二人のお嬢さん達、ちょっと怪訝そうな顔をしたが、前の人に習い「二礼二拍手」、肅々と儀式を済ましイソイソと立ち去って行った。  
役人は前例主義、良い悪い、適否の検証をすることなく、前例に従えば間違いないという発想が中心思想、若いお嬢さん達の滑稽さを笑い捨てることはできない…

賀詞交歓会における富岡清・熊谷市長の、面白い話であった。  
「二礼二拍手」は神社の基本的な参拝方法、「聖天様」は真言宗のお寺であり、せっかくの初詣も、ご利益は半分かも知れない。  
常識を知らない事にも驚くが、何となくそれを真似てしまう安易さは、この若いお嬢さん達に限らず、往々にして起こり得ることかもしれない。

とりわけ日本の「役人」と称される公務員は、前例に従うことが第一の使命と心得ているようだ。それは村役場の職員から国家公務員、裁判官に至るまで、見事に徹底された彼ら特有の能力と言って良い。  
だから、現状を維持し、昨日と同じ安心した社会生活を継続させる力は、底知れぬ実力を発揮する。このパワーが戦後70年、我国の発展を支えた原動力になっていたことも事実であろう。  
世界一優秀な「役人」と言われる所以(ゆえん)である。

しかしこの思想はややもすると、とてつもない「弊害」を生む恐れがある。  
それは変化への対応力を見失う習性ということである。  
何か新しい事が起こった場合、前例がない。  
想定外のリスクが目の中の現実になった時、どう、対処していいか、分らないのである。

世界中の仕組みが大きく変わった終戦から70年たった今、今までの社会秩序を支えてきた制度や慣習、法律や価値観まで、大きく変わりつつある。  
あるものは疲弊し不適合になり、似つかないものへと変貌している。  
今こそ求められるのは、これらに対するイノベーション、変化へのダイナミックな対応力なのだろう。前例を大切に重んじ、平和で安心できる社会構築を目指してきた日本人に対し、大きな試練を課せられる時になってきた。  
一人ひとりが自ら考え、工夫し新たな発想を行動に移す、その確実な実践こそ、我々に与えられた宿命的ミッションだと思っている。